その本はそこに　読書案内 48　～　そうだったのか！建築史　～

建築の世紀末　鈴木博之　（晶文社　1977.05.30）

■この本は、ぼくが生まれる１年前の 1977 年に出版されています。
あつかわれるのは主に、19 世紀～20 世紀末までです。
あとがきより
「・・・建物が、安定した魂の拠りどころであることをやめ、つぎつぎに建て替えられてゆくべき存在に変わり、建物から人間の営みの安定したぬくもりが消え、人の手ざわりが失われてゆくありさまが、19 世紀の建築の歴史の過程で勝者となった理念がいまのわれわれをとり囲む都市と建物とを生み出してゆくように思われてくる。・・・解決され得ない矛盾と、消え去っていったものに注目してみようと思い・・・建築をめぐる理念の対立（様式）と、建物に刻み込まれる手ざわり（装飾）とに焦点をあててみようと思い立った。」とあります。

■ギリシアへ・・・新古典主義２方向＝柱への執着、建築の過去を見出そうとする態度。
■ストロウベリ・ヒル・ゴシックの館・・・英国ゴシック・リバイバル。
■理想の混迷・・・カトリック権威・貴族→市民社会へ。建築＝社会的客観性が必要に。
■ピュージン・・・著書刊行、ゴシックを社会的解釈して評価した建築家。
■ヴィオレ・ル・デュク・・・著書刊行、ゴシックを合理的解釈して評価した建築家。
■手づくりと集団・・・ラスキン、モリス。中世の理想、あくまで個人的か。
■アール・ヌーヴォー・・・本質は謎。
■装飾の神話・・・神話的な世界観から、新らしい自然界装飾モチーフは理性の次元へ。
■中世の破綻・・・機械の使用。中世のかわりを私たちは持つか？
■ボシニーとエウパリノス・・・２人の小説が象徴する。20 世紀の建築は、造形の問題→理念の問題へ。
■近代精神・・・意識的分析、方法的意識の出現。新しい試みの価値の増加。建築は投機・政策へ。
■細部に神がやどる・・・曖昧さの拒絶、理念、発想、新しさ、新しさ、新しさ・・・もうひとつの可能性は？
「建築は決して他の建築と無縁ではないし、建てられる場所と無縁でもなく、どれ程多くの建物が建てられようとも、それらはすべて特殊解として建てられる。周囲の建物のまとまりにたいする積極的な認識、既存の建築物の保存、改造に対する意欲。既存の建築、周囲の街並は本質的には検証不可能な他人である。その不可知論を認めた時に、はじめてその関係が開けてくる。」といいます。

■本書「建築の世紀末」の、最初と、最後の言葉は、
・・・それはつまり、あなたとわたしから生じたので、
　　あなたもしくはわたしから生じたのではない。
ヴァレリー「わがファウスト」より、とあります。
たくさん良いこと書いてるのに、こういう気取った引用は本をとっつきにくくさせる原因ですよね。。
■鈴木博之さんは、2010 年～2014 年まで犬山明治村館長。
新しいものだと「保存原論」、古いものだと「日本の地霊（ゲニウス・ロキ）」など著書が多数あります。（黒野）